La Asociación de Intercambio entre Yokohama y España

AIYES通信

横浜スペイン交流協会会報

2001年7月1日発行　第28号　発行・横浜スペイン交流協会事務局

2001年度定例総会盛大に開催

新世紀を迎え、心新たに11年目に向って歩み始めた当協会2001年度定例総会は、若葉の香り漂う4月26日（木）午後3時より、かながわ県民活動サポートセンターにおいて会員多数が参加、宮崎理事の司会により開会した。

まず最初に下山会長の挨拶に続き、議長を選出、議事に入った。議事は飯塚常務理事より2000年度の事業報告、続いて齋藤副会長より決算報告があり廣瀬監事による監査報告があった。

つぎに2001年度の事業計画、予算案が審議されいずれも原案どおり可決された。

続いて、新理事として廣瀬勝亮氏（事務局担当）、鎌田暁子氏（スペイン・サロン担当）、新監事として、小田泰治氏が新たに推挙され、いずれも全員賛成で可決承認され無事終了した。

下山会長叙勲祝賀会開催さる

駐日スペイン大使ほか130余名が参加

去る4月26日（土）午後6時30分より、横浜駅西口にある横浜ベイ・シェラトンホテルの「浜風の間」において下山会長の叙勲を祝う会が催された。

参加者は当協会会員をはじめ、会長の幅広い人脈を感じさせる多彩な分野からの方々、また会長のご家族・ご親戚。さらに遠くは仙台から宮城スペイン協会の事務局長飯渕雅康氏、大阪から関西日本スペイン協会の運営委員長中村尚徳氏が、お祝いに駆けつけられた。

祝賀会は、当協会会員の児玉寛子さんの筝のBGM から始まった。児玉さんは生田流の琴の師範で、アトリエ「筝こだま」を主催しており、当協会が宮城スペイン協会と共催で1995年にセビリアとコリア・デル・リオに桜を植樹した際にも、セビリアで行ったレセプションのイベントに筝の演奏を行っている。この児玉さんの筝の音にのって、会長夫妻が入場し、正面の雛壇に着席した。

進行役の司会は、同じく当協会会員の足立友香里さんが勤めた。足立さんの司会は流れるように、しかも暖かくスムースに進んだ。

齋藤由基彦副会長が「この度の下山会長の受賞は、会長はもとより、当協会の会員一同にとっても栄誉であり、喜びである。これは偏に、当協会と関係のある多くの方々のご理解とご支援、ご指導の賜物であり、ここにその感謝の意をあらわし、また歓びを共に分かちたい」と主催者としての開会のことばを述べた。

続いて、ホアン・レニャ駐日スペイン大使が挨拶をされた（挨拶の詳細は次頁を参照）。

来賓挨拶では、当協会の顧問で元駐スペイン日本大使の林屋永吉氏が、下山会長のユニークな発想と情熱を称えた。また横浜市長より「下山会長をはじめ、当協会が日本文化の紹介などを通じて、日本とスペイン両国の友好親善に尽力していることへの賞賛と今後のさらなる活躍を期待する」旨のメッセージが、横浜市総務局国際室長永井富雄氏の代読で披露された。

その後、来賓の紹介と祝電の披露。会員を代表して臼井澄枝さんとジュアン・ドラド・ロペス氏が、そしてご家族を代表して会長のご長男下山利明さんとお孫さんの長坂恵美里さんから花束の贈呈が行われた。

これに対し、下山会長より「この勲章は、私が日ごろから人と人の出会いを大切にしてきた成果であり、“スペイン大好き”の会員皆さんや親しい友人たちへの賜物。これからもこの勲章の趣旨に沿って、日西親善のため協会員の皆さんと共に、交流をさらに深めていきたい」との謝辞があった。

乾杯は、宮城スペイン協会事務局長の飯渕雅康氏の音頭で盛り上った。飯渕氏は「両協会が特に密接な関係にあり、この度の下山会長の受賞は宮城スペイン協会にとっても歓びであり、受賞を祝し、横浜スペイン交流協会のますますの発展を祈念する」旨のお祝いのことばがあった。

ここで気分は一変し、アトラクションにうつった。まずは前奏をしてくれていた児玉さんが自身でアレンジしたスペインのメロディーを取り入れた筝の演奏。続いて、当協会理事でもある上野淑子さんの歌。上野さんの歌はラテンなどバラエティに富んだもの。最後に「赤い靴」はレイ・アルフォンソ正田さんのギターにあわせてのものとなった。

レイ・アルフォンソ正田さんの演奏は、ポンチョを纏って（彼の愛称はポンチョ）、ギターを弾きながら各テーブルの間を、流して歩くスタイル。なかでも「シェリト・リンド」は参加者みんなで合唱となった。

一段落したところで、「ムイ・ビエンこうなん」のメロディが流れる中、下山会長夫妻はホアン・レニャ

大使ご夫妻と共に、各テーブルを回り列席者と歓談したり、記念写真を撮ったりしながら和やかな一時を過ごした。

お開きは飯塚劭常務理事が「今後ともスペインの事を知るだけでなく、こちらから日本の文化をもっとスペインに知らしめよう」との抱負と、列席者へのお礼を述べて閉会のことばとし、同氏の発声で参加者一同「一本締め」で最後を締めくくった。

▲お祝いの言葉を述べるホアン・レニャ大使と下山会長

ホアン・レニャ駐日スペイン大使の祝辞（要旨）

下山貞明様、奥様並びにご出席の皆様。

この度はスペイン国王フアン・カルロスⅠ世から下山会長にイサベル女王勲章オフィシャル十字型章が贈られまして、こうして皆様とお祝いすることができましたこと大変嬉しく思います。

また、駐日スペイン大使としてこうして横浜に来ることができ、横浜スペイン交流協会の下山会長をはじめとする会員の皆様とお会いする機会を得ましたことを大変嬉しく思います。横浜スペイン交流協会の皆様はスペインの友であり、スペイン文化の友であり、その皆様とこうして一緒に過ごすことができ大変嬉しく思います。

下山会長とは20年前、港南区ひまわり親善国際交流協会の時代から、親しく友人としてお付き合いをさせていただいております。その20年前を振り返りますと、あの頃の情熱というものが、未だに息づいているのを感じ取ることができます。下山会長は日本とスペイン両国の関係発展の権威者であられます。いつも両国関係のためにお力を尽くしてこられました。私はこの場をお借りしてそのご協力、ご尽力に対して感謝をしたいと思いますし、私も妻のカルメンも、下山さんの人間性、そのすばらしいご性格、すばらしい業績に感謝をあらわしたいと思います。

横浜スペイン交流協会の会員の皆様は会を挙げて、下山会長の模範的な活動をいつも支えていらっしゃいます。過日、スペイン国王フアン・カルロスⅠ世は、その下山会長の栄誉を称え、イサベル女王勲章オフィシャル十字型章を贈られました。これはスペインと日本の友好関係のために尽くされた下山会長、また会員の皆様の栄誉を称えるものでもあります。この勲章の伝達の役を私自らが果たすことができまして、大変嬉しく思います。この叙勲は、本当に下山会長に相応しいものだと思います。また、この勲章は、横浜スペイン交流協会の功績を称えるものでもあります。

最後に弛まぬご尽力とご協力、友情に対し、下山会長に感謝申し上げたいと思います。また、下山会長、奥様、ご家族の皆様、そして横浜スペイン交流協会の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈りいたしたく思います。

ご受賞おめでとうございました。

芸術を楽しむ 魅力いっぱいスペイン・サロン

●３月のスペイン・サロン

３月17日のサロンは会員の牧瀬貢さんを囲んで、「スケッチ旅行の勧め」について話を聞いた。牧瀬さんは１月の「AIYES 通信」に絵と文を寄稿されている。

定刻に会場に入ると、すでに沢山の水彩画が並べられてあり、プロの絵描きの作品かと思ったら、全くのアマチュアと聞いてびっくり。面構えは立派なプロに見えるのだが・・・。

氏は在職中スペインに赴任されたこともあるそうだが、退職後はアタッシュケースを絵筆に替え、スペイン、フランス、中南米各国をスケッチ旅行され、スペインではパラドール85ヵ所全部を歴訪したそうだ。旅行中は常にスケッチブックを持ち歩き、旅先ではペンでアウトラインだけを描き、家に帰ってから色をつけるとか。現地では目で楽しみ、帰ってからは絵の完成を楽しみ、また絵の中の情況を説明して楽しみ、旅を二重三重に楽しんでいるようだった。特に雑音皆無のスペインの田舎が好きだとか。

絵は写真と違って、不必要なものを省略したり、写真では殆ど写らないものをかき込んだり、デフォルメしたり、色彩で印象を強めたりで、自分の思いを表現できるのが良いということだ。また新しい画材で、色鉛筆のようなもので描いてから水でのばして水彩画にする、すぐれ物も使っているという。

ちなみに、牧瀬さんのホームページはhttp://www.net-kis.com。ここに氏の作品が紹介されている。

後半、パコさんがスペイン語で話をした。サン・マルティン祭でのMATAPUERCOS の行事。豚の殺し方、豚料理の話など興味津々。牧瀬さんが持っているパラドールの本にのっていた、ロドリーゴのパラドールは、パコさんの実家のすぐそばで、そこに写っていた学校はパコさんが通った小学校だったというのは偶然だった。

参加者は20名。司会は高柳治子さん。当日は彼女のお誕生日（パコさんの見立ては33歳）だったので、CUMPLEAÑOS FELIZの合唱で会を閉じた。

報告　赤堀嶺男

●４月のスペイン・サロン

テーマは　“闘牛について”でした。

闘牛クラブ〈東京闘牛の会〉編集長の足立有香利さん（当協会会員）のお話を、実際にビデオで闘牛を見ながら臨場感あふれる内容で拝聴した。

２時間が「あっ」という間に過ぎたほど、出席者の皆さんが興味を持った。

闘牛はスペイン国民の祝祭と呼ばれ、派手な衣装にピンクのストッキングをはき、剣と赤い布を持った闘牛士が観衆の注視の中、砂場で猛牛に対峙するフィエスタであり、文化、芸術であるという。

出席者の殆どが闘牛を現地で観たとのことであったが、漠然と見てきた人が多かったようで、歴史に裏打ちされた豊富な内容の説明を聞き、沢山の質問がなされた。特に、マタドールたちの服装や、牧場のこと、闘牛に関するルールについての質問が多かった。

“闘牛はなぶり殺しではない、単に殺しだけのものならとっくに昔に消滅したであろう。その一瞬一瞬に不確かさと悲劇に何かを感じる芸術である”といわれる。

▲闘牛への熱き思いを語る足立さん

日本にも愛好家が多い。足立さんはサラマンカ大

学留学中にファンだった、素敵な若い闘牛士が悲劇を遂げたその時に、この世界に興味を持たれたとのことであった。

しかし、最近この闘牛の文化も、狂牛病がらみで複雑化を余儀なくされているらしい。

報告: 牧瀬　貢

●5月のスペイン・サロン

5 月度のスペイン・サロンは「湘南アルモニコス」のギタリストの稲田美晴さんとその仲間達(Octeto)による演奏とお話だった。

スペインを始めヨーロッパの音楽、日本の音楽『浜辺の歌』、ラテンアメリの音楽『キサス、キサス』など身近なギターの調べに酔いしれた。

また、司会の石川さんの面白い逸話を交えてのお話で盛り上がった。

最後に、クラベリートを参加者全員で合唱した。

後半は皆で歓談し、その中でパコさんからスペインに於けるTuna（学生を中心にした歌の仲間）の歴史と現状について説明があり和気あいあいのスペイン・サロンだった。　報告: 牧瀬　貢

▲ギターの調べに聞きいる参加者たち

※※※※※※スペイン・サロンへのお誘い※※※※※※

7月～9月のスペイン・サロンのご案内を致します。お知り合いや友人をお誘い合わせ、多くの皆様のご参加をお待ちします。

なお、サロンは原則として、毎月第3土曜日の午後2時から開催します。

●2001年7月例会

日　時:　7月21日（土）１４：００～１６：００

場　所:　県民サポートセンター7階／７１１号

テーマ:　『スペイン人から見た日本』

日本在住で、当協会の会員でもあるSr. Francisco Ortega Garcia（通称：Pacoさん）が話してくれます。その後自由歓談とします。

●8月度　8月はお休みです

●2001年９月例会

日　時：　９月１５日（土）１４：００～１６：００

場　所：　県民サポートセンター７階／７０８号

テーマ：　『ピレネーの南』季刊　（スペイン専門誌）の発行者の武藤崇氏（カサ・イベリカ代表）にお話を伺います。その後、自由歓談とします。

担当／大竹智栄子　　牧瀬　貢
鎌田　暁子　　宮川美匂子

文化講座ぞくぞく開講

本年度の総会で、文化講座の開講が決定してから、有志の方々が手をあげてくださり、早速以下の二つの文化講座が開講の運びとなった。多くの会員が参加し、会員間のコミュニケーションをはかっていきたいものである。

（１）スペイン料理教室へのお誘い

開　講：９月９日（日）

以前試験的に行ったスペイン料理教室を、新たに定期的な文化講座の一つとして、本年９月９日から毎月一回開講します。

指導して下さるのは、前回に大変御好評を頂いた、スペイン料理「オリーブ」の中村義雄シェフ。スペインの文化を料理の面から実際に作りながら楽しく体験しようとの企画で、中村シェフのご協力を頂き次のような要領で開講します。

場　所：　スペイン料理のレストラン「オリーブ」
横浜市西区高島２－５－１０　（横浜駅東口より徒歩３分）

日　時：　毎月第２日曜日　正午から　午後３時頃まで

人　数：　10人（会員を優先いたします）

料　金：　出欠席に関り無く一人月額3,500円　（材料費、厨房使用料等を含む）

ご用意頂くもの：　エプロン。履物は、サンダル及びハイヒールは不可。

参加希望者は、７月31日迄に下記のスペイン料理教室担当まで、人数、氏名、住所と電話番号をはがき、または、ファックスでお申し込みください。人数に限りがありますので、10人を超えた場合は抽選で決めさせて頂きます。

＊中村シェフのプロフィール：30年程前に初めてスペイン料理と出会い、東京のレストラン数軒で修行の後、スペインに渡り３年間の研鑽を積み帰国。1979年に初めて横浜駅西口に「オリーブ」を開店し、現在は、同駅東口徒歩３分の所で営業を致している。同氏は当協会の最初の賛助会員でもある。

申込問い合わせ先：スペイン料理教室担当　廣瀬　勝亮

（２）スペインをモチーフとした押し花教室

開　講：９月１７日（月）

美しいは生花そのままの色合いを残した「ふしぎな花倶楽部」の押し花をみんなで楽しみましょう！

1998年第３回桜植樹のさい、セビリアとロンダでスペインの人々にこの押し花を指導し、彼らに感動を与えた。そんな押し花を教室として定期開催する。指導は「ふしぎな花倶楽部」のインストラクターの方々。

場　所：　県民サポートセンター709 号　（横浜駅西口、横浜三越百貨店裏）

日　時：　原則として毎月第３月曜日　13：30～15：30
第１回：９月17日　　第２回：10月15日　　第３回：11月12日

料　金：　１ヵ月＝3,500円（材料代を含む）

申込問い合わせ先：押し花教室担当　伴野忠子
廣瀬孝子

JAPONESES EN ESPAÑA

Joan Dorado López

Hoy quiero contarles una historia real y muy interesante sobre la ayuda que los compatriotas japoneses pueden ofrecerse asi mismos cuando viven o quieren vivir fuera de las fronteras de su país.

Creo que todos ustedes habían oido hablar en alguna ocasión sobre la ejemplar figura del internacionalmente conocido escultor japonés Sr.Sotoo Etsuro. Hace muy pocos días que este famoso artista volvió a ser noticia en la prensa nipona, al anunciarse que por fín el había terminado, después de dieciséis años de duro trabajo, la realización de las esculturas que el propio arquitecto Don Antonio Gaudí (1852 - 1926) diseñó para la puerta Oeste, del templo barcelonés de "La Sagrada Familia".

Siempre es y será una buena notícia saber que otra parte del maravilloso e inacabado templo se ha materializado con éxito. Todos los barceloneses y españoles amantes del arte y en concreto de la obra de A.Gaudí, estaremos eternamente agradecidos a las manos del escultor japonés que con su arte, esfuerzo, talento y entrega, modela y cincela las esculturas del actual templo de "La Sagrada Familia". Gracias por su obra Sr. Etsuro, gracias de verdad y le pedimos con el corazón en la mano que continue por favor... ¡Ganbatte ne!

Otro artista japonés llamado Akihito Tanaka, aunque menosconocido por el momento, que es pintor y carpintero y también un excelente constructor de casas de madera al más puro estilo tradicional japonés, vive ahora en España gracias a la ayuda e intervención del escultor Sotoo Etsuro.

En verano de 1999 conocí al Sr. Tanaka en el transcurso de una conferencia - tertulia sobre la fotografía que yo estaba dando en la Casa de España.

Recuerdo que en nuestro primer contacto el me informó, con una inusitada pasión, sobre su firme intención de vivir algún día en la ciudad de Barcelona. Akihito había viajado por primera vez a Europa en 1992 y se enamoró irremediablemente de España y especialmente de la capital catalana.

Yo como buen español y barcelonés que soy, comprendía perfectamente la atracción que mi ciudad natal podía ejercer sobre este estudiante de español.

▲Sres. de Sotoo

Akihito me pidió que le impartiera clases particulares del idioma español y también de la lengua catalana. Acepté con mucho gusto y juntos comenzamos una larga aventura que le transportaría a la definitiva realización de sus sueños.

El me hablaba continuamente en nuestra clases privadas de español, de la belleza que había visto en las paredes de las calles estrechas del barrio gótico de Barcelona; del olor a cerveza de barril que flotaba en el ambiente de la Plaza Real; de los impresionantes edificios modernistas, de la Catedral, de Montjuic, de las Ramblas; de la Sagrada Familia y el Parque Guell; del Puerto, del Tibidabo...De lo hermosa que era para el la naturaleza mediterránea.

Poco a poco el Sr.Tanaka iba contagiandome y contaminandome con sus relatos. De esa manera fue como acabé por ponerle como deberes, escribir cartas en español a todas las personas que había conocido en su primera y única estancia en España, solicitandoles información de trabajo.

Este esfuerzo añadido,le sirvió para mejorar su caligrafía y comprender a un nivel más profundo las construcciones del castellano. Sin embargo las contestaciones a sus cartas y a sus constantes llamadas telefónicas no eran nada prometedoras. La realidad del mundo laboral en España era una situación difícil de superar.

Por otro lado, a Akihito Tanaka no le faltaba trabajo en Japón. A decir verdad, casi cada més terminaba alguna que otra construcción que estaba bajo su responsabilidad y sin ningun descanso, contrataba la realización de nuevas y consistentes casas de madera. Todo esto, más las consabidas obligaciones como cabeza de familia, frenaba considerablemente la posibilidad de desplazarse a Barcelona para buscar personalmente un trabajo como un inmigrante más. Akihito Tanaka,mi estudiante particular, empezaba a desilusionarse.

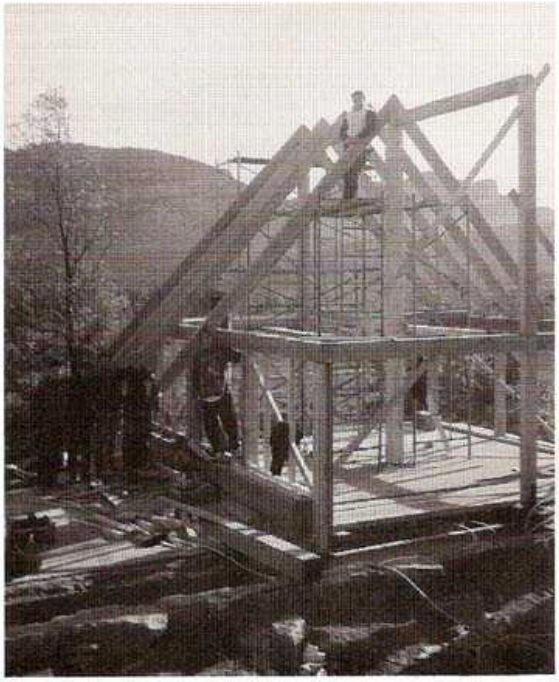
Quizás por la tristeza que reflejaban sus ojos cada vez que alguien le rechazaba la posibilidad de trabajar y en consecuencia de vivir en España, o porque yo también me encariñé, en cierta medida, con la idea de que él y su familia pudieran estar juntos en Barcelona, decidí ponerme en contacto telefónico con el Sr. Sotoo Etsuro.

La verdad es que yo nunca antes había hablado con él y no lo conocía de nada. Aún así, el resultado de mi llamada telefónica no pudo ser mejor:

- ¡Tuuut...Tuuut...Tuuut... Diga!
- Quisiera hablar con el Sr.Sotoo Etsuro, por favor.
- En este momento no está en casa, yo soy su mujer. ¿Con quién hablo, por favor?
- Me llmo Joan Dorado López y le llamo desde Tokyo. Estoy enseñando español a un artista japonés que desea de todo corazón vivir en Barcelona. Por supuesto que lo primero que necesita es encontrar trabajo. Quisiera preguntarle a su marido si mi estudiante puede escribirle una carta explicando los motivos por los que desea vivir y trabajar en Baracelona.
- Sí, claro, como no.
- Bien, entonces él les mandará una carta a la Sagrada Familia dirigida a su marido. ¿Le parece bien?
- Creo que es mejor que la envie a nuestro domi cilio particular. Tiene algo para escribir...Si,...bien tome nota por favor,...Calle....x.....Número....x..... Distrito Postal....x....Barcelona - España.
- Muy amable y muchas gracias por la confianza que nos ofrece. Ahora mismo le paso con mi estudiante.
- Mosimosi....Watasi - wa Akihito Tanaka desu....."

Y de esta forma tan sencilla y humana Akihito Tanaka se puso en contacto directo con el famoso escultor japonés Sotoo Etsuro.

Akihito llegó a escribirle hasta tres cartas y un buen día, cuando se celebraba en Japón las fiestas del "Año Nuevo del 2000",el Sr.Sotoo Etsuro le



▲Las casas de Akihito Tanaka en Cataluña

llamó por teléfono informandole que había encontrado un trabajo para él. ¡Vaya regalo de Año Nuevo! Gracias a Dios, por fín la suerte había aparecido para cruzar la puerta de los sueños y deseos de mi buen estudiante de español. El Sr.Etsuro, a través de un amigo particular, le había encontrado un trabajo de carpintero especializado.

De repente Akihito se convirtió en constructor y "Maestro" de magníficas casas de madera, en una privilegiada zona montañosa y residencial de la provincia de Barcelona.

▲Akihito con su familia en su nueva vivienda española

A mediados del més de enero del año 2000, Akihito ya estaba viviendo en un pequeño pueblo situado entre las hermosas montañas del pre - pirineo catalán, en una vieja masía que le había ofrecido el jefe de su nuevo trabajo.

El Sr.Tanaka primero tenía que restaurar y acondicionar adecuadamente esta antigua casa de piedra para que su mujer Noriko y su hija Hina pudieran sentirse totalmente cómodas. A finales de la Primavera del mismo año, la masía ya estaba arreglada y aclimatada y ellas se trasladaron a Cataluña para vivir allí definitivamente.

Noriko y Hina se han adaptado perfectamente a su nueva vida en España. Hina, una pequeña y linda japonesita de cuatro años de edad, habla, escribe y comprende el catalán bastante bien, después de un año escolar. También su madre, Noriko, estudia y aprende con rapídez las dos lenguas: la española y la catalana, mientras disfruta de una vida feliz y tranquila entre la naturaleza.

Akihito y su equipo de constructores no cesan en su labor, y poco a poco, magníficas casas de madera afloran por los valles pirenaicos con la firma de unas buenas manos japonesas.

Ahora ya saben todos ustedes que el Sr. Sotoo Etsuro además de ser un artista capaz de esculpir y modelar las piedras de la "Sagrada Familia" es también un ser humano capaz de ayudar a las "Familias de Carne y hueso".

Si señor, asi se hace ¡Mi Enhorabuena desde Japón! Sin ninguna duda es usted muy buen escultor ¡El Mejor!

Este tipo de ayuda altruista que algunos seres humanos son capaces de dar desinteresadamente, es algo que a mi personalmente me alegra el corazón. Aunque la verdad sea dicha, siento un poco de envidia sana cuando miro las fotografías que me envía mi ex - estudiante de español y catalán. En ellas veo que él y su familia están rodeados de naturaleza, paz, alegría y tranquilidad.

会員投稿

花　守

杉野宣雄

▲下山会長夫妻と筆者（右）

三月　木枯らしが東風に変わり、大地が胎動し始める季節。いつせいに湧き上がる命の産声は、自ずと佐保姫の存在を実感させる。佐保姫は私にも、桜前線に乗せて南から嬉しい便りを運んできてくれた。

ガンを告知され絶望の淵にあった女性が、病院内に展示されていた押花に癒され、生きる力を得て、この春、無事に退院を迎えると言うのだ。こうした声を頂く度に、押花作家としての至福を感じると同時に、自然の偉大な力に敬服し次代の子供たちへ共生の道標を示しながら自然を残す必要性を痛感する。

現代の子供たちは、感受性の低下、命への如実感が希薄化しているといわれている。しかし、私が小学校等で講習会を開くと、子供たちは脆い押花を愛しそうに扱い、「この花は蝶になりたがっているの」「飾ってあるだけでお部屋が匂うようだ」などと、素晴らしい感受性を披露してくれる。子供たちは、普段、感じるきっかけを失っているだけなのだ。

私は少年時代を自然豊かな福岡で過ごし、しかも植物学者である祖父と、押花の基礎を築いてくれた研究者の父、植物好きな理科教員の母という恵まれた環境で育った。そんな中で、私はいつしか自然の伝道者たる『花守』となることを夢みた。そして私は今、押花という自然の草造力と人間の創造力の融合表現を通じて、自然を守りその美しさを伝えてゆく道を歩んでいる。

自然の発するメッセージを世界中に届けたい。そして、押花を芸術、文化へと高めたい。人知及ばぬ美と気を秘めている自然には人の心を潤す真の芸術たりえる可能性があり人々がその自然の力を感じたときにこそ、共生への道が開かれると考えるからだ。

生前の池田満寿夫氏に「君の押花は素晴らしい。でも新しい芸術をつくるのは大変だぞ」と激励頂いたことがある。この言葉を胸に活動し、押花を楽しむ会『ふしぎな花倶楽部』は大きく発展した。そして、自然という最強のメッセンジャーの力を信じて世界に発信し続けた結果、海外でも多くの同志を得、昨年には、世界押花芸術協会を発足した。

最近は、百貨店での企画展や美術館、海外での展覧会等の話が来るようになった。一歩一歩確実にステップアップしている。これからも、花に感謝し、多くの人々と共に押花を楽しんでいきたい。

★★★★★賛助会員紹介（第８回）

㈲ 日西商事

たべ処、のみ処、うさぎのいる島

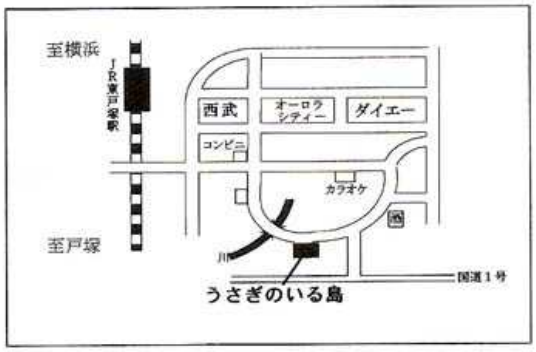
お客様によくなぜ店名をうさぎのいる島にしたのか尋ねられます。昔、開拓者が船である島を発見し上陸したところ、その島にはたくさんのうさぎがいたそうです。開拓者はこの島をうさぎのいる島（エスパー

ニャ）と名付けました。

当店はスペインワイン、食材の輸入販売会社の直営店でもあり店内にはスペインのバルをイメージした作りになっておりスペイン産ハモンセラーノ、チョリソはじめすぐにつまめるタパスなどご用意しております。

入り口すぐ左手地下には、ワインセラーがありスペイン、フランス、イタリア、ドイツなど常時300 種類、700本以上のワイン等ストックしております。当店ではお飲み物はセルフサービスになっており、お客さまにお好きな物を出して来ていただくシステムになっております。横浜スペイン交流協会の会員の皆様にはワインを一杯サービス致します。

▲地下ワインセラーの入口



営業時間　PM 5 ：00 ～ PM 11：00　日曜休み
TEL　０７０－５０２４－８１９６
横浜市戸塚区品濃町1252-3（ＪＲ東戸塚駅下車）

INFORMACION

●星まつり

当協会会員の足立友香里さんが主宰するアール企画が、歌とワインとチーズで暮ゆく夏の宵を楽しむ夕べとして、下記の要領で「星まつり」と称したコンサートを開く。

日　　時：　2001年７月６日（金）　開場　18：00　　開演　18：30
会　　場：　ムジカーザ（東京都渋谷区西原3-33-1）　　TEL 03-5454-0054
費　　用：　前売　5,000円（ドリンク代・消費税込み）　当日　5,300円（ドリンク代・消費税込み）
申込み・問い合わせ：　TEL　090-9243-5046　アール企画

プログラム

ウエルカムドリンク
　コンサート第１部　ロドリーゴ作曲　４つの愛のマドリガル他
　コンサート第２部　ゲラナドス作曲　歌劇ゴイェスカより　マハとナオチンゲール他
フェアウェルドリンク
　出演　荻野砂和子（ソプラノ）　西川理香（ピアノ）　足立友香里（スペイン文化研究家）

●ロドリーゴ生誕100 年記念　スペイン王立セビリヤ交響楽団演奏会

アランフェス協奏曲など、ギターの名曲を数多く残したスペインの作曲家・ロドリーゴ。彼の生誕100年を記念に、本場スペインのオーケストラと、新進ギタリスト・木村大を迎えてスペインの名曲を贈る。

日　　時：　2001年７月10日（火）　　19：00開演（18：30開場）
場　　所：　東京オペラシティ
出演　指揮：　アントニ・ロスマルバ　ギター：木村　大　スペイン王立セビリヤ交響楽団

曲　　目：　ロドリーゴ/ アランフェス協奏曲　　ビゼー/ カルメンより　　トゥリーナ/ ロッシーオの行列　　ファリャ/ 三角帽子より

申込方法：　下記へ電話またはファックス
TEL　03-3401-9561　　FAX　03-3479-6209

支払方法：　㈱東京アイエムシーの指定口座（下記）へ　※口座名義人　㈱東京アイエムシー
郵便局　　赤坂郵便局　　00120 －9 －395064
銀　行　　三井住友銀行　青山支店　普通預金　1110236
入金を確認しだい、申込書記載の住所にチケットを郵送

特　　典：　横浜スペイン交流協会会員はとくに20％の割引をする。
S席¥10,000を¥8,000　　A席¥8,000 を¥6,400　　B席¥6,000 を¥4,800

2001年度（平成13年度）会費未納の方へお願い

当協会では、年４回の会報発行をはじめ、スペイン・サロンなど各種の催しを行っていますが、これらはすべて皆様からの会費と、事業による収益でまかなわれています。

すでに振込期限は切れていますが、まだお振込の手続きをすませてない方は、至急規定の振込用紙で、お近くの郵便局からお振込みください。

正会員3,000円、賛助会員10,000円です。

本年度から振込手数料をご負担していただくことになりました。よろしくご理解の上お願いいたします。なお、この期限までに会費のお振込がなかった場合、自動的に退会されたものとみなし、その手続きをとらせていただきます。

― 賛助会員各社の会員サービス内容 ―

事前に会員証を提示することで、下記の賛助会員企業より、標記のサービスを受けることができます。

賛助会員	住所	電話番号	会員サービス内容
レストランオリーブ	横浜市西区高島2-5-10	045-441-4996	サングリアー杯を無料サービス
カサ・デ・フジモリ関内本店	横浜市中区相生町1-25	045-662-9474	サングリアー杯を無料サービス
Bar Español	カサ・デ・フジモリ関内本店前	045-651-1074	サングリアー杯を無料サービス
カサ・デ・フジモリ目黒店	ＪＲ目黒駅（東京）徒歩５分	03-5420-5328	サングリアー杯を無料サービス
アランフェス	横浜スカイビル11階	045-442-0581	サングリアー杯を無料サービス
アマポーラYokohama	横浜ルミネ６階	045-453-6851	サングリアー杯を無料サービス
パラドール・デ・かまくら	江ノ電長谷駅そば	0467-22-6798	サングリアー杯を無料サービス
太陽海外航空㈱	東京都中央区京橋2-2-14山陽アネックスビル	03-3281-2441	成田空港使用料を当社が負担いたします
ＪＴＢ団体旅行横浜支店	横浜市中区相生町4-75 ＪＴＢ．ＹＮ馬車道ビル	045-664-2730	ツアー料金割引（添乗員付のみ）ルックＪＴＢ、ＪＴＢエース各３％、旅行用品割引トラベランド店にて10%割引特別カード進呈
メイプル・ノブ	横浜市神奈川区西神奈川1-6-1 サクラビル701	045-321-5638	押し花材料代10%引
日西商事（うさぎのいる島）	横浜市戸塚区品濃町252-3	070-5024-8196	ワイン一杯を無料サービス

＜編集後記＞

下山会長の叙勲パーティが盛大に開催され、多くの会員の方がお祝いにかけつけてくれました。けれども会長の言葉にあるように、それはまた協会の地道な活動を支えてきた、一人一人の会員の皆さんに対するお祝いでもあります。今年度からは文化講座も始まります。スペイン語講座、スペイン・サロンとならんで協会の柱として育てていきましょう。

ところでワールドカップ2002開幕まであと１年を切りました。スポーツの話題など投稿をお待ちしています。

＊　投稿寄稿宛先　〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町２－24－２　かながわ県民センター内
かながわ県民活動サポートセンター
レターケースNo.184　横浜スペイン交流協会会報係